

原著論文

# 大和言葉による人体各部の骨の名称について

野田 亨

| びわこリハビリテーション専門職大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

## 【要 旨】

古代の中国大陆や朝鮮半島の漢方医学が当時の日本に持たされた時、漢字表記の身体名称も受容された。このような本来外来語であった漢字表記の身体各部の表現に対して、古代のどのような日本語を対応させていたのかという観点から、人体の「骨」に関する大和言葉を収集した。日本におけるもっとも古い文字資料は古事記、日本書紀、万葉集などであるが、それらに身体各部の骨の名称はほとんど見いだすことはできない。漢方医学の医学書においても、漢語による骨名を確認することはできるが、それがどのような古代日本語（大和言葉）の身体語と対応していたのかは不明な点が多い。やや時代は下るが、平安時代に編纂された倭名類聚抄には身体各部の漢字名称と対応する和訓が万葉仮名で記載されており、現在のところ、この書物が最も古い身体各部の大和言葉を系統的に伝えている資料である。そこで本稿では倭名類聚抄と同時期や鎌倉時代以降に編まれた新撰字鏡、字鏡集、類聚名義抄、身体和名集、さらに文字資料などに記された和訓を確認することにより、「骨」に関わる古い大和言葉による名称を合わせて 100 以上収集した。本稿では、これら収集した大和言葉による「骨」の名称をそれぞれの身体局所に分け、解剖学や方言学の視点からの検討も加え、古代日本人の言語世界や身体観を考察する。

## 序論

海外からの医学的知識が日本にもたらされる以前、古代日本人が身体各部をどのような言葉で表現し、またどのように認識していたかという問題は興味深いと思われるが、不明な点が少なくない。本稿では、現代の解剖学教育の基本でもある、人の骨格、骨に関する大和言葉を収集し、古代日本人が身体各部の「骨」にどのような名称を与え、また「骨」をどのようなものと認識していたかを用例から検討しようとするものである。なお、ここで用いている「大和言葉」とは古事記や万葉集などの万葉仮名で表された身体名称や古辞書の身体の漢字に付された「カナ」で表された語、言い換えれば、和訓（日本語としての読み）としておく。

東アジアから古代日本に伝わった漢方医学は、文字を持たなかった日本に漢字による身体語をもたらした。当時の日本人はそうした漢語による身体語を受け入れ、当時の大和言葉（和訓）と対応させた。大和言葉による身体表記、特に本稿であつかう身体各部の「骨名」については、奈良時代の文字資料である万葉集、古事記、日本書紀には記載は少ないが、平安時代に編まれた倭名類聚抄や新撰字鏡などのいくつかの古辞書には比較的多く記載されている。さ

らに鎌倉時代の資料まで含めると、重複する語彙やそれ以前の資料になかった語彙なども確認できる。こうした資料を検討することによって中国大陆や朝鮮半島からの影響を強く受ける以前の日本語（大和言葉）による身体語彙の一つである「骨」に関わる語彙をうかがい知ることができる。本稿では、各資料から得られた骨の名称について、漢字名称と和訓（大和言葉）との対応関係、身体部位名と骨の名称との関係、時代による骨の名称の変化などについても検討、考察を行った。

## 方法

平安から鎌倉時代に編まれた古辞書から収集した身体各部の骨を表す大和言葉を現在の解剖学の記載に従って、頭部、頸部、背部、腹部、上肢、下肢の順で部位別に記載した。ここに骨に関する語を選ぶ基準は、「保禰（ホネ）」、あるいは「加波良（カハラ）」など万葉仮名で骨を表すと思われる語、身体を表す漢字に「ホネ」、あるいは「カハラ」と仮名で書かれている語、そして骨偏の漢字で仮名の和訓のあるものなどを選んだ。

本研究で検索した主な資料は、新撰字鏡（901 年頃成立、天治本、一部、享和本）、倭名類聚抄（931 年頃成立、元和古活字 20 巻本、一部、箋注倭名類聚抄 10 巻本）、字鏡集（1245 年頃成立、尊経閣善本）、類聚名義抄（1251 年頃成立、観智院本）、引経訣（1771 年頃成立）、身体和名集（1861

\*Corresponding Author: 野田 亨  
E-mail: t-noda@ot-si.aino.ac.jp

## 大和言葉（和訓）による骨名表記法

漢字の和訓（カナ表記）：対応漢字（万葉仮名表記）追加説明【出典文献略号】【引用文献番号】

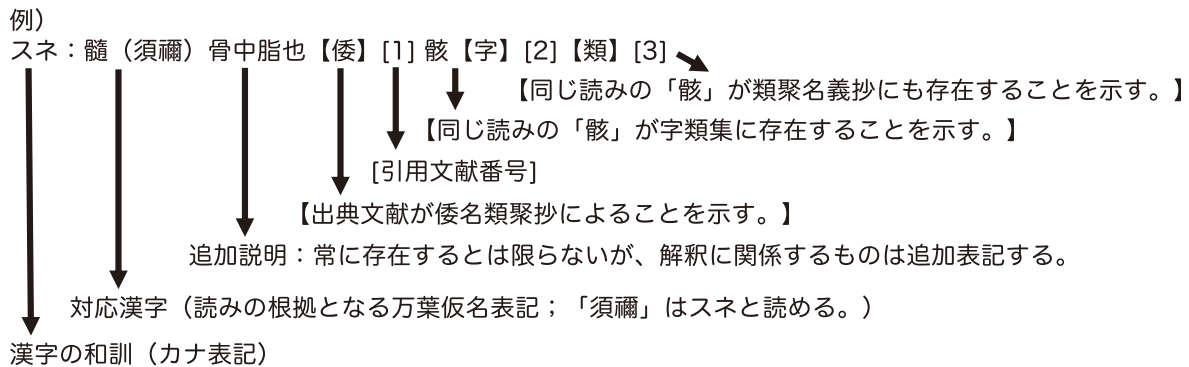


図1 大和言葉（和訓）による骨名表記法  
 結果に記載した表記の仕方を示した。

年頃成立）などであり、その他の古典文学資料も一部取り入れた。時代表記に関しては、年代が推定できるものは、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代（南北朝、戦国時代、安土桃山時代を含む）、江戸時代とし、それぞれの時代が確定し難い場合は、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代までは古代、鎌倉時代、室町時代までは中世、戦国時代、安土桃山時代、江戸時代までは近世と呼ぶことにした。

それぞれの語彙が記載されている具体的な用例を挙げることは容易ではなく、どの程度、一般に使用されていたかも明らかではない。また骨を表すと思われる古い漢字の中には、現在の文書作成ソフトでは表現できず、割愛せざるを得なかったものもある。本来1字であるが、1字として表示できなかったものについては、偏（へん）と旁（つくり）を2字構成として横に併記し、(1字)の表記を加えて示した。

それぞれの語彙の記載方法については、まず語彙を身体部位ごとにまとめ、五十音順に書き出した。それぞれの語彙には見出し番号をふり、骨を表すと思われる語の和訓にあたる読みをカタカナで表し、対応する漢字をあげ、その万葉仮名表記が存在するものには（ ）内に表記したが、カナ表記のみしか書かれていないものは万葉仮名を省略せざるを得なかった。次に万葉仮名に続いて併記されている説明箇所は、意味の解釈上必要と思われるもののみ、適宜記載した。他の資料等で用例のあるものは、続けて用例を引用した。引用した上記資料については、【新】などの略号を付記した。同じ和訓を取るものは、続けて列挙し、同じ和訓でも異なる漢字表記のあるものは改めて記載した（図1）。引用した主な資料の略号は、新撰字鏡は【新】、倭名類聚抄は【倭】、字鏡集は【字】、類聚名義抄は【類】、引経訣は【引】、身体和名集は【身】を表し、それ以外の資料はそれぞれの書名を示した。上記の各資料の表記法にはそれぞれ特徴があり、中でも倭名類聚抄は各語の出典、

反切、万葉仮名による表記があり、最も詳しい。新撰字鏡は古い字体の漢字を多く掲載しているが、万葉仮名による和訓が付されているのは、その一部の漢字のみである。類聚名義抄、字鏡集は漢字辞典であり、多くの漢字にカタカナによる和訓が付されている。引経訣、身体和名集は江戸時代に書かれた書物で、引経訣には一部の骨に古代に用いられた万葉仮名とは異なる変体万葉仮名が付されている。身体和名集は、漢字にカタカナによる和訓が書かれているが、一部の身体語にはカナのみの表記である。したがって、下記の結果のすべての語の表記には、一部、統一性が保てなかった項目もあることを断っておく。

## 結果

### 古代日本人が呼んでいた骨の概念と名称

日本における最も古い文字資料は古事記や日本書紀であるが、その中で「骨」という漢字が記載された箇所は少なく、下記の部分である。

【用例】「王子の御骨を埋みし所は、専ら吾よく知れり。また其の御齒を以ち知るべし。」【古事記 下つ巻 顕宗天皇】[1]

この用例では、「骨」は全身の骨を意味すると考えられるが、正確な訓みは不明である。

引用文献に引用した校訂者は訓みを「カバネ」とつけている。

【用例】則ち當麻蹶速が脇骨を蹶（ふ）み折（さ）く。【日本書紀】垂仁紀[2]

こちらは漢文で書かれているので、こちらも「脇骨」の正確な読みは不明であるが、「カタハラホネ」と推測されている。現代でいう、あばら骨、肋骨と思われる。

平安時代、鎌倉時代の古辞書からは、「骨」の類語は比較的多く見出される。

1. スネ:髓(須禰)骨中脂也【倭】[3] 骸【字】[4]【類】[5]
2. スネシル:骸(須禰汁)【新】[6]
3. ナヅキ:髓【字】[4]
4. ホネ:骨(保禰)肉之核也【倭】[3] 骸【字】[4]
5. ホネノナカノアナ:髓【字】[4]
6. ホネノナカノアフラ:髓【字】[4]
7. ホネノナヅキ:髓(保禰乃奈豆支)【新】[6] 髓,髑【類】[5]

上記の記載から「骨」は、万葉仮名の読みから古代日本語でも現代と同様、「ホネ」と呼んでいたであろうことがわかる。またその説明として「野王案云骨肉之核也」とあるところから、その意味は、「筋肉の中の果物のタネのような硬いもの」と解釈できるが、この説明は「野王案」とあるように、中国(南北朝時代の梁)の野王、すなわち「玉篇」の編者である顧野王の私案という意味で、古代日本人の身体観から生まれたものではない。

骨髄についても「野王云髓骨中脂也」と記されており、骨の内部に脂が入ったものという野王の私案が示されている。「ホネノナカノアフラ」という字鏡集の和訓はこの私案に添うものである。「ホネノナカノアナ」の訓みは少なくとも鎌倉時代の日本人の訓みで、「骨の中の穴」と解釈でき、骨髄があった空間を表した和訓として興味深い。

上記の大和言葉による骨髄の表現には「スネ」、「スネシル」あるいは「ナヅキ」なども記されていたが、「スネシル」という表現は骨髄を液状のものと解釈している。また新撰字鏡、字鏡集、類聚名義抄では、「髓」を「ナヅキ」と読んでおり、骨髄を、「脳」を意味する「ナヅキ」[7]と相同な構造物と考えていた可能性がある。つまり、骨の内部にある脂のようなものを「ナヅキ」とも呼び、骨と骨髄との関係を、頭蓋骨と内部の脳のように見なしていたように読める。現代の解剖学から見ると、大脳を覆う頭蓋骨は板状の扁平骨ではあるが、それ自体に骨髄はあり、脳は骨髄のような脂肪組織ではなく、神経組織なので、上記のようなアナロジーは正しくない。ただ直感的に捉えた両者の在りようが似ていたということである。

また「骨」を意味する万葉仮名の「保禰(ホネ)」と書かれた文字を現代日本語の「ホネ」と同じ響きの語とみなして良いのかという点にも注意をしておきたい。古代日本語では、「は行」の音が、いわゆる無声両唇摩擦音として「f音」で表されていたことがこれまでの研究からわかっており、「保禰」の実際の発音は、現代の我々が発音するような hone ではなく、fone, さらに古くは、無声両唇破裂音である「p音」の pone に近い発音であった可能性がある[8]。実際、古代日本語の特徴をとどめているとされる琉球語では「骨」の語の発音は、f音やp音を含んだ響きを持ち、上記の古代の日本語の特徴を残している。「骨」の発音は、与那国、宮古では huni, 波照間、西表、武富、石垣、多良間、伊良部、今帰仁では puni, 首里では funi, 久米島で

は fuuni と「f音」と「h音」、「p音」などの発音が混在しており[9]、その発音の特徴は上記の歴史言語学の見解に近い。ただ琉球語といっても琉球地方を構成している各島が海によって隔たれているので、語の響きも各島間でかなり異なっており、「骨」を表す語も多様であることがわかる。一方、北海道地方のアイヌ語でも「骨」を pone と発音するが、こちらは古い日本語がアイヌにもたらされて影響を受けた語ではないかとも推測されている。アイヌ語の「骨」の古い形は kew (keu) とも推測されている[10]。こうした方言上の身体語彙の響きについての研究も古代日本人の身体観の解釈に新たな視点を提供していると思われる。

## 身体各部の骨名

### 頭部全体の骨

頭部全体の骨を表す名称には、おもに「カシラ」という頭部を示す語に、所有や属性を示す格助詞の「ノ」を付け、「ホネ」や「カハラ」という語を続けて記述されているものが多い。「ホネ」は皮膚直下に硬く触れる塊を指し、「カハラ」は瓦状の平面骨を指したものと考えられる。

8. アタマノホネ:頭顱骨【身】[11]
  9. カウベ:首頭(加宇倍)【倭】[7] 頭【類】[12]
  10. カシラノカハラ:顱(加之良乃加波良)【倭】[7] 顱【字】[13]
  11. カシラノホネ:髑【字】[14]【類】[15] 髑【字】[14]
  12. カシラホネ:顱【字】[16]
  13. クビノホネ:髑髏【身】[17]
  14. サルケボネ, サレカウベ:天靈蓋【身】[18]
- 「サレカウベ」は現代でも残っている「シャレコウベ」という名称の古い形と考えられる。天靈蓋は人の頭部の骨を漢方薬として使用する際の名称である。
15. シニヒトノカシラ:髑(死人之頭)【新】[6]
  16. トクロ:髑髏【類】[15]
  17. ヒトカシラ:髑髏(比止加之良), 玉篇云髑髏頭骨也。【倭】[7]【類】[15]

### 頭部の個々の骨

頭部は、前頭骨、頭頂骨、後頭骨などの多くの骨から構成されていることは現代では常識となっているが、古代の日本語にはそのような個々の骨に名称は見られない。頭部は皮膚の直下に骨を直感しやすい部分ではあるが、特に突出した部分にのみ「ホネ」の名称が付されている。頭部各部を表す漢字には「頁(おうがい)」が多用され、骨偏はごくわずかである。前頭部の名称は、次のとおりである。

16. ヌカ:額【類】[19]
17. ヒタイ:額【身】[20]
18. ヒタヒ:額(比太比)【倭】[7] 煩顱【字】[13] 髑【字】[14] 額額類【類】[19]
19. フタイ:額【身】[19]

上記のように、現在の「ヒタイ」は、古くは「ヒタヒ」



と呼び、いくつかの漢字に和訓が当てられている。「𩑦」という漢字のみが骨偏で記されており、この部位の「骨」の認識がうかがわれる。

現代の解剖学で表す頭頂部は「イタダキ」と呼び、古くは、下記の漢字に「イタダキ」という和訓を当てるが、骨偏の漢字はない。

20. イタダキ：顛（伊太々支）【新】[21] 頂（伊太々支）【新】[22] 顛、頂（伊太々岐）【倭】[7] 頂、顛【字】[23] 顛、顛【類】[24]

側頭部から頬にかけての部位は、「カハチ」、「カマチ」、「ホホ」、「ツラ」など、異なる名称が存在する。これらを表す漢字はかなりの数になるが、それらに対する和訓は「ハチ」、「カハチ」、「カマチ」などのグループ、「ツラ」、「ツラホネ」のグループ、「ホホ」のグループなど、「カハチ、カマチ」系、「ツラ」系、「ホホ」系の3つに集約できる。

21. カハチ：顛（加波知）上頬後也【新】[22]、顛（加波知）顛車【倭】[7] 顛【字】[25] 顛【字】[13]  
22. カマチ：頤【字】[26] 頤【類】[24]  
23. カマチボネ：輔骨【身】[27]  
24. ツラ：頬（豆良）【倭】[7] 頤【字】[25] 頤【類】[28] 面【身】[29]  
25. ツラホホ：頬【類】[30]  
26. ツラホネ：顛（豆良保禰）、玉篇云頬骨也、或云輔車【倭】[7] 【字】[31] 頤【字】[25] 【類】[32]  
27. ハチ：顛【身】[33]  
28. ホウボネ：輔骨【身】[34]  
29. ホホ：頬（保々）【倭】[7]

上記のように、この3グループには漢字の種類が多く、それぞれの指す部位を同定、区別するのは必ずしも容易ではない。大和言葉の「ホホ」の語源は花のつぼみが膨らむような状態を「ホホマル」という語から生じたと考えられており、口に何かのものを含む場合も「ホホム」と表現する[35]。したがって「ホホ」は、柔らかく膨らむことができる頬骨と上顎骨の間の部分を指すと推測される。これに対して「ツラ」は頭部の側面を表現する語で、「ホホ」が指す部位よりはやや外側の頬骨弓から下顎角にかけての周辺となり、両者は厳密には微妙に異なる部位を指しているであろう。したがって、「ホウボネ」は、「ホホ」の上部の頬骨周囲、「ツラホネ」は下顎骨角から頬骨弓周囲が想定できる。一方、「カハチ」系表現には、上記、新撰字鏡の「上頬後」の説明の他、下記の用例がある。

【用例】「憎き法師のいひ事かな」とて、かまちを張りてけり。【今物語 十八西行の受難】[36]

この表現から類推すると、法師が言ったことに対して腹を立てていることで、張った箇所は口や頬に近い部分であることが考えられる。また奈良時代末に成立したとされる新訳華嚴經音義私記には、頬ヒゲの説明に「カマチ」が使われている。

30. カマチノヒゲ：鬚（加末智乃比偈）【新訳華嚴經音

義私記】[37]

とあり、実際の頬ヒゲが生える部位から類推すると、「カマチ」は下顎骨に沿った「ツラ」に近い箇所である可能性が高い。この用例を考慮すると、「ハチ」、「カハチ」、「カマチ」などは、頬骨弓周囲を含んだ頭部の外側面の側頭骨や下顎骨を中心とした部位とするのが妥当かと思われる。

「カマチボネ」という表現は、上記資料では、江戸時代の身体和名集にのみ見られる比較的新しい語彙と思われ、体表から触知しやすい頬骨弓や下顎骨上部を指すと考えられる。

31. 水吸骨：ミズスイホネ（密費斯乙福涅）【引経訣】[38] 引経訣には上記の語が記載され、頬車、腮骨と同様と追記がある。これは液状のものを吸う際に見える骨と解釈するなら、上記の「ホウボネ」にあたる頬骨の眼窩下、あるいは上顎骨頬骨突起周囲にあたるかと思われる。

32. 完骨：ミミセセノホネ（美々勢々乃保禰）【倭】[39] 【類】[15]

これは、その語のとおり、耳の背部にあたる場所に触れる骨を意味し、現在の解剖学では側頭骨の一部、乳様突起と呼ぶ部分である。なお「ホネ」を省いた「ミミセセ」の用例は、狂言の「縄綱」、「鬼がはら」などのいくつかの作品に見ることができる。

- ミミセセ：【狂言 縄綱】[40]

【用例】「先目は猿まなこ、鼻は高梁鼻、口は耳せせまでくはつときれております。」

後頭骨については、玉枕骨、頭横骨、枕骨など、漢方医学由来の名称が知られているが、それらに「ホネ」などの和訓を持つ語彙は見当たらない。

33. ハナノショウジ【身】[33]

【用例】「瘡ヲカイテ、鼻ノ障子ガ落チル」【大言海】[41]

この「瘡」とは、江戸時代に流行していた梅毒の皮疹を指し、病状が進行すると、鼻中隔も侵され、「鼻ノ障子ガ落チル」と表された。鼻中隔は、前方は軟骨、後方は硬骨からなるが、「鼻ノ障子」は前方の軟骨部を指すと思われる。

## 上顎骨、下顎骨、歯

口は上顎と下顎で囲まれた部分で、それぞれから歯が生えている。一部の漢字に齒偏や「ホネ」の和訓も認められる。

34. アギ：腭（阿岐）口中上腭也【倭】[42]

35. アギト：頤【類】[28] 腮【身】[11]

36. アゴ：頤、齶【身】[11] 現代の下顎と同じ呼び方である。

37. オトガヒ：頤（於止加比）【新】[43] 頤（於止加比）【倭】[39] 頤【字】[25] 頤【類】[44]

38. キホネ：頤車（岐保禰）頤骨也【倭】[39] 【類】[28]

39. ヲギロ：頤【身】[45] 「ヲトガヒ」と同じ意

40. ヲトカヒ：頤【字】[26] 頤【字】[25] 頤【字】[13] 頤【身】[45]

倭名類聚抄の説明からは、「アギ」は口の中の上顎部分を指すように解釈できる。大言海では、上牙（ウハギ）、すなわち、上の歯に由来する語と解釈して、やはり口の中の上顎を意味するとしている。「アギ」、「オトガイ」、ヲトガヒ」を引用した資料には骨を表す「ホネ」の和訓やそれらの漢字に骨偏はない。唯一、「キホネ」を顎骨と捉えている点に下顎骨の一部という認識を見ることができる。「キホネ」の「キ」は「牙」で牙齒の意味であり[46]、本来、この歯の生えている骨の部分という意味なので、上顎骨と下顎骨の両方になりうるが、なぜか下顎骨を指すようである。「アギト」を顎門として、上顎と下顎の間と解釈することもある。日葡辞書に記載されている Agui は下顎を意味している[47]。

歯は骨とは異なる構造であるが、硬く、骨に準ずる部位とも言える。成人の歯は全部で32本あり、上顎にあるものだけを見ると、左右合わせて、前から切歯4本、犬歯2本、臼歯8本（小白歯4、大臼歯4）、智歯2本（第3大臼歯）の計16本となる。歯の古い名称は、次のとおりである。

41. ウスハ：齠（宇須波），老人齒如白也【倭】[42]【身】[54]

42. オソバ：齠齒（於曾波）齒重生也【倭】[55] 齠，斷【類】[56]

説明から、この語彙は、いわゆる八重歯を指すと理解できる。

43. キバ：牙（岐波），在齒後最近輔車者也【倭】[42]【身】[18]

【用例】「足ずりし，牙喫み建びて」【万葉集 卷第九 1809】[49]

この用例は、「足ずりし，歯をくいしばり，叫んで」という意味で、「牙」は、現代の我々が想像する犬歯というより、まだ奥歯と解釈の方が適しているように思える。また身体和名集でも「牙」を奥歯としており、それらを考慮すると、「牙」は臼歯と考えるのが妥当であろう。

44. ヌカハ：板齒（奴加波）【倭】[42]

45. ハ：齒（波）【倭】[42]【類】[48]

46. ハニカム：齠（波爾加无）齒重生也【新】[57]

説明から、この語もいわゆる八重歯と理解できる。

47. マエバ（万倍婆）【箋注倭名】[50] 板齒【身】[53]

48. ムカバ（牟加婆）【箋注倭名】[50] 向齒【義経記】[51] 板齒【身】[52]

49. ムカフバ（牟加不婆）【箋注倭名】[50] 板齒【身】[52]

これは前面に向いている歯、つまり前歯を意味すると考えられる。

50. ヤエバ：齠【身】[17]

51. ヲクバ：牙【身】[58]

52. ヲヤシラズ：真牙【身】[58]

歯の名称では、「ヌカバ」、「キバ」、「ウスバ」、「オソバ」などが上記の中では最も古い資料で確認できる表現で、「マエバ」、「オクバ」、「ヤエバ」などは比較的新しい表現のように思える。現在では、「牙（キバ、あるいはキ）」は動物の犬歯や切歯を指し、人では犬歯（糸切り歯）をあてる。しかし、倭名類聚抄では「牙」を「在齒後最近輔車者也」と説明しており、歯の中でも、輔車、すなわちツラに近い、いわゆる奥歯を指していると思われる。一方、切歯にあたる歯には板歯をあてている。

【用例】御齒は三枝如き押齒（オシバ）にましき。【古事記 下つ巻 顕宗天皇】[1]

この用例は、市邊忍齒王御子についての記述であるが、御子の名の「忍齒」は押齒の意味で「オシバ」と読み、「オソバ」と同様に八重歯の意味でこの御子は八重歯であったと考えられる。上記、43の万葉集の用例とこの古事記の用例から、奈良時代以前の歯の表現には「牙」と「齒」の2種類があったことがわかる。

上記、頭部の主要な骨名、歯の名称が示す推定部位を図に表した（図2、3）。

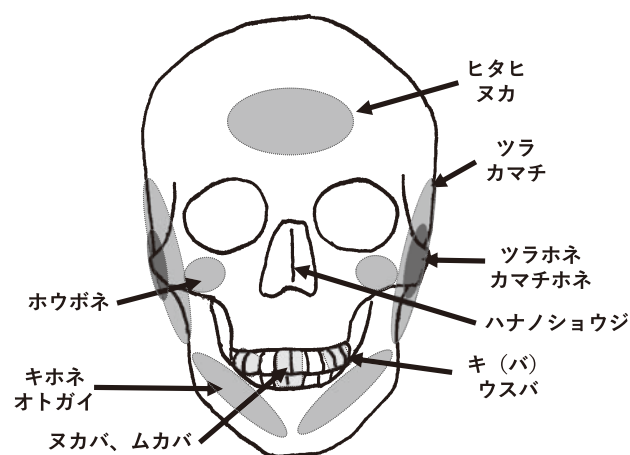


図2 頭部の各骨名称（正面図）

頭蓋骨の正面図に本文に記載した骨名とその推定部位を記載した。

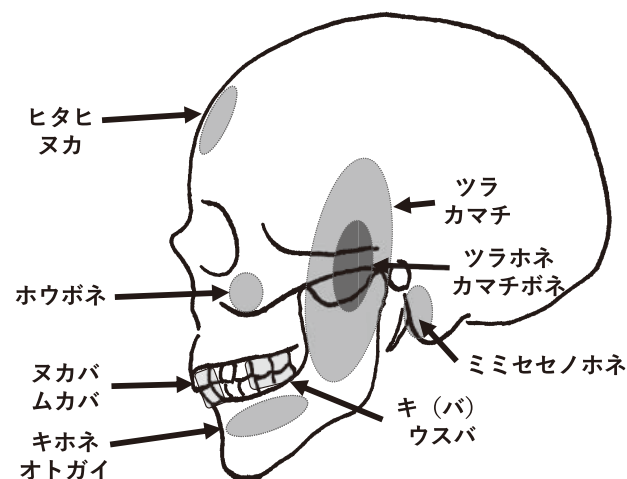


図3 頭部の各骨名称（側面図）

頭蓋骨の側面図に本文に記載した骨名とその推定部位を記載した。

頸部から脊柱にかけての骨

53. ホトケボネ：結喉【身】[34]

これは漢字から、いわゆる喉ぼとけを指すと思われるが、実際、触れるのは甲状軟骨であり、硬骨ではない。

## 脊柱

54. セナカ：骶【字】[59]  
55. セナカノホネ：髀【類】[60] 月宣（1字）【類】[61]  
56. セボネ：脊骨【身】[62]

## 頸椎

57. 甕：項中骨也【新】[63] この漢字に和訓はないが、意味上、頸椎を意味すると解釈して挙げた。  
58. タマカケボネ：玉懸骨【保元物語】中巻[64]  
【用例】「暗さは暗し、太刀の当て所少し下がりがたれば、玉懸骨にぞ切り付けたる。」

玉懸骨は首飾りを着ける際にちょうど引っ掛かるようにうなじの首の後ろに飛び出している骨を指す。解剖学では第7頸椎の棘突起部分が大きく後方に出ているので、この突起部に対して名付けられていると解釈できる。この突起部のゆえに第7頸椎は隆椎とも呼ばれる。

## 胸骨

59. ムナボネ：鳩尾骨（無奈保禰）【倭】[3]【類】[15]（蔽心骨）【身】[52]

## 肋骨

60. アバラボネ：肋骨【義経記巻三】[65]【身】[11]  
【用例】弓手の小腕（こがいな）踏み折り、馬手の肋骨（あばらばね）二枚損ず。  
61. オリボネ：折骨【義経記】巻八[66]  
【用例】長崎太郎が馬手の鎧の草摺半枚かけて、膝の口、鎧の鎧軋金（みづをがね）、馬の折骨五枚かけて切りつけたり。  
62. カタハラホネ：脅肋（加太波良保禰）【倭】[3] 髀【類】[5] 肋【類】[67]

身体部分の「骨」に関する日本最古の記述は下記のものと思われる。

- 【用例】則ち當麻蹶速が脇骨を蹶（ふ）み折（さ）く。【日本書紀】垂仁紀[2]

この読み下し文の原文は漢文であるので、「脇骨」の正確な読みは不明であるが、諸本の注には倭名類聚抄の「脅肋」と記された語の和訓の「加太波良保禰（カタハラホネ）」(3)を当てている。

63. カタホネ：膀（脇）【新】[68]  
64. タスケノホネ：肋（太須介乃保禰）幹骨【倭】[3]【類】[67]  
65. ハラホネ：髀【字】[59]  
66. ワキボネ：肋骨【身】[58]

肋骨については、語の中に「ホネ」のついた大和言葉による名称が多いが、あまり統一した名称が見られない。身体、脇、膀（カタハラ）にある骨という表し方がある。また61の用例にあるように馬の肋骨と思われる表現に「オリボネ」がある。

## 肩甲骨と鎖骨（上肢帯）

67. カイカネ：胛（加伊加禰）【倭】[69] 髀【字】[14] 胛骨【身】[27]  
68. カイガラボネ：胛骨【身】[27]  
69. カタ：甕（可太）【新】[70] 髀【字】[59] 髀【字】[14]  
71. カタサキ：髀【字】[14]【類】[71] 肩髀【身】[27]  
72. カタノオホホネ：髀（加太乃大骨）【新】[70]  
73. カタノホネ：髀（加太乃保禰）【新】[64] 髀髀（加太乃保禰）【倭】[69] 髀髀【類】[63] 髀【字】[56] 髀、髀【字】[11]、鈇盆骨【類】[12] 髀【類】[3]  
74. カタホネ：髀（加太保禰）【新】[63] 髀【類】[72]  
75. カタボネ：鈇盆骨【身】[27]  
76. カリガリボネ：胛骨【身】[27]  
77. ヤカタホネ：髀【類】[72]

これらの名称は「カイカネ」、「カタ」、「カタノホネ」、その他に大別される。このうち「カイカネ」は肩甲骨、「カタ」、「カタノホネ」も鎖骨にあたると思われる。髀の字が含まれるグループは「カタ」、「カタノホネ」、「カタノホネ」、「カタボネ」などで、それらの多くに共通する鈇盆骨があり、鍼灸という「鈇盆」が大鎖骨上窩にあたるので鎖骨と解釈できる。胛の字が含まれるグループは「カイカネ」、「カイガラボネ」、「カリガリボネ」などで、肩甲骨を意味すると思われる。「カリガリボネ」の「カリガネ」は「カイガネ」からの変化である。「カイガラボネ」という表現は、肩甲骨が全体として三角形を成し、左右対称で貝殻を開いたように見えるからとも考えられる。新撰字鏡には「カタホネ」に2種類の漢字が存在し、一つは「膀」、もう一つは「髀」で、前者は脇という字が添えられており肋骨を表すと思われる、後者は、他の諸本との比較から肩に関する骨と思われる。

肩甲骨は古くから占いに用いられ、古事記にもその記述が見られる。

- 【用例】天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天のははかを取りて、占合ひまかなはしめて、【古事記】上つ巻[73]

したがって、上記の文中の「肩」は肩甲骨を意味すると思われる。また鹿には鎖骨は存在しないので、古事記の筆者には「肩」は肩甲骨であるとの認識があったと思われる。

## 上肢（自由上肢）の骨

倭名類聚抄では肢體を衣太（エダ）と呼び、四肢を表していた[69]。字類集では骨偏に「支」を合わせた1字の漢字とし、「テアシ」、「エダ」、「アシテ」などの和訓を与え



ている。

78. アシテ：骨支（一字）【字】 [14]
79. エダ：骨支（一字）【字】 [14] 髀【字】 [60]
80. テアシ：骨支（一字）【字】 [14]
81. ヒチ：髀【字】 [14]
82. ツメノコフ：爪甲（豆女乃古布）【倭】 [74] 骨甲（1字）【字】 [14]

現代ではほとんど、上肢、下肢を続けて呼ぶ場合、「テアシ」であるが、古くは「アシテ」という言い方もあった。上肢に骨の名を持った名称や骨偏の漢字はあまり見受けられない。

## 寛骨、骨盤（下肢帯）

83. オビカケボネ：帯懸骨（屋弼結僕涅），監骨，腰髀骨【引】 [75] 腰髀骨【身】 [58].
84. コシ：腰（古之）【倭】 [3] 髀【字】 [60]
85. コシノウヘノホネ：髀【字】 [4]
86. コシホネ：髀（古之保禰），腰骨也，髀，兩髀間也【倭】 [7] 髀【類】 [5]

髀が髀の両端に位置する骨と解釈すると、髀が尻に、髀が腰に相当することになる。

87. コシボネ：腰髀【身】 [76]
  88. シリノホネ：髀【類】 [71]
  89. シリホネ：髀【字】 [4] 【類】 [5]
  90. モモノウヘ：髀【字】 [4]
  91. ヨコシ：髀（与己志）【新】 [70] 髀（与己志）【新】 [65]
- 「オビカケボネ」はその名の通り、腹部に巻いた帯がちょうど掛かる位置にある骨という意味に解釈できる。「髀」で表された「ヨコシ」は「カタ」とも読んだようで、腰のみをあらわすものではなかったと思われる。

## 下肢（自由下肢）の骨

### 大腿骨

92. アシ：脚足（阿之）【倭】 [77] 髀（阿志）【新】 [63]
  93. ソトモモ：髀【身】 [78]
  94. ホカモモ：髀【字】 [60]
- 「ホカ」も外を意味するので、ソトモモと同じ意味になる。
95. モモ：髀【字】 [60] 髀【字】 [4] 髀【類】 [5]
  96. モモノフシ：骨段（1字）【字】 [60]
- 腿（モモ）にある節（フシ），つまりこの関節は膝関節となる。
97. モモノホネ：髀【字】 [4] 髀：【字】 [60]

### 膝蓋骨

98. アハタ：髀（阿波太），膝骨也【倭】 [77] 髀【字】 [60] 【類】 [71]
99. アハタコ：髀（阿波太古），膝骨也【倭】 [77] 髀【字】 [60] 【類】 [71]
100. ヒザ：膝（比佐）【倭】 [77] 【身】 [20]

101. ヒサカハラ：骨段（1字）【字】 [60]
102. ヒサカミノアハタ：髀（比佐加美乃阿波太）【新】 [60]
103. ヒザサラ：膝髀【身】 [74]
104. ヒサノカハラ：膝髀（比佐乃加波良）【倭】 [77] 髀【類】 [5]
105. ヒサノハシ：髀【字】 [60]
106. ヒサノホネ：髀【字】 [60]
107. フシノホネ：骨段（1字）【字】 [60]

## 下腿の骨

108. ウチカマチボネ：内輔骨【身】 [54]
109. ソトカマチボネ：外輔骨【身】 [78]

「輔」は助ける，補佐するという意味があり，二本ある下腿の内側の骨を「ウチカマチボネ」，外側の骨を「ソトカマチボネ」と読んだのであろうが，これらの名称は，身体和名集，整骨新書などの江戸時代の資料にも散見される。「ウチカマチボネ」は脛骨に，「ソトカマチボネ」は腓骨に相当すると考えられる。

110. ハキ：髀（波木）【新】 [63] 髀【字】 [14] 髀【字】 [14] 髀【類】 [5]
111. ハギ：脛【身】 [33]
112. ムカハキ：髀（牟加波支）【新】 [6] 【類】 [5]
113. ムカバキ：髀【身】 [52]
114. ムカフズネ：髀【身】 [52]

現在，下腿については，「ハギ」や「スネ」の両方が使われるが古い資料では，「ハギ」が多く，「スネ」は少ない。大言海には，「親のすねをかじるト云フハ，脛ニハアラズ，コノ髓ヲイフナルベシ」【大言海】 [79] との説明があり，ここでは「スネ」は骨髄を意味していることがわかる。「ムカハギ」を「向脛」と解釈すると，それと似た表現に「向股（ムカモモ）」【古事記】 [80] がある。両者に共通する「向（ムカ）」は前に向いていると解釈する考え方と，左右の大腿部や下腿部が互に向き合っていると解釈する考え方がある。

## 足の骨

115. アナサキノホネ：髀【字】 [60]
- ア【足】 + ナ【ノと同じ】 + サキ【先】 + ノ + ホネ【骨】と分解でき，足先の骨と解釈できる。
116. ウチクルブシ：内踝【身】 [54]
  117. ソトクルブシ：外踝【身】 [78]
  118. ツブナキ：踝（豆不奈岐），足骨也【倭】 [77] 【類】 [81]
  119. ツブブシ：踝（豆布々之），足骨也【倭】 [77] 【類】 [81]
  120. ヲケヲケボネ：然骨【身】 [58]

「踝」は，現在のくるぶしにあたる部分で皮下にすぐ骨を感じる部分であるが，骨の記載はない。ただ説明に足骨也との説明があるため，記載した。「ヲケヲケボネ」の用

例は他に見られない。対応する「然骨」は鍼灸では、経穴の一つで足根骨の舟状骨に相当するようである [82]。

## 考察

### 漢語による身体語彙と大和言葉（和名）による身体語彙の対応

富士川によると、飛鳥時代や奈良時代には日本はすでに中国や朝鮮の医師を招いて、韓医方を受容していたようである [83]。したがって身体各部を表現した漢字も同時に日本にもたらされていたことになる。今回の研究で使用した主な資料は、新撰字鏡、倭名類聚抄、字鏡集、類聚名義抄、引経訣、身体和名集などであるが、それらの中には、現代にはほとんど使用されなくなった無数の漢字が記載されている。上記の辞書の中には、骨偏を持つ漢字は多いが、それに和名の読みのついているものは一部にとどまる。例えば、新撰字鏡の写本のうち天治本には骨偏の字が78字あるが、和訓のあるものは少なく [84]、享和本では和訓の読みのあるもののみの16字しか示されていない [85]。さらにそれらから「ホネ」という名称が含まれる語は約3、4語にすぎない。こうしたことから分かるように、当時、漢字を生み出した中国とその字を取り入れた日本との間の「骨」に関わる明らかな語彙数の差があったと思われる。考えられる理由の一つは、いわゆる漢方医学の鍼灸治療では、経穴の位置を厳密に決定する必要があり、より精緻な体表解剖学が必要で、医学用語が体系的に確立されていたが、一方、海外からの韓医方や唐医方が伝わる以前の古代日本では、そのような身体細部に施す医术もなく、したがって詳細な身体名称も存在しなかったのではないかと考えられる。

次に、特に漢和辞典である新撰字鏡、字鏡集、類聚名義抄などの写本を直接、見てみると、同じ一つの漢字にいくつもの異なる身体部位名や骨の名称が集中的に記載されていることもある。一つの骨に対して多くの漢字が対応する場合もあれば、一つの漢字に複数の身体部分が対応するなど、混乱がある。その理由の一つは、おそらく、長期にわたって中国大陸の各王朝から多くの文字資料が集積してくるうちに、中国や朝鮮の異なる地方の語彙、異なる王朝によって語彙の変化なども影響して、受け入れてきた漢字の持つ意味が多様化してしまった可能性もあろう。

### 大和言葉による身体名称と骨名

上記の多くの大和言葉による骨名称の中で特徴的なことは、身体の各部位名に所有や属性を示す格助詞の「ノ」を付け、続いて「ホネ」という語を合成させた「・・・ノホネ」という骨の名称が相当数あることである。上記の「アナサキノホネ（髌）」や「コシノウヘノホネ（髀）」などは、

「ノ」が二つも付いていて、それぞれ、「足の先の骨」や「腰の上の骨」と解釈できるが、これらの日本に取り入れられた漢字がそのような特定の骨に固有の大和言葉が定義（形成）されていなかったことを表している。また、これらの漢字に対する和訓はあまりにも説明的で、あえて和訓をつけるとすればこうなるという程度の漢字に対する消極的訳語ともとれ、実際どのように使われていたのか疑問である。逆に、助詞の「ノ」が付いていない骨の名称は、その語が一つの名詞として確立された語彙で、よく使用された可能性のある名称とも考えられる。

また上記の骨名称は、ほとんどが体表から触知しうる骨の部分的な隆起部を指すもので、現在の解剖学でのように個々に区分された骨に付けられた名称ではない。したがって、現在の解剖学でいう1つの骨には複数の大和言葉による「骨名」が存在していたことになる。この点は、漢方医学でも同じで、経穴の位置を示すために付けられた複数の骨名が、厳密に1つの骨とどのように対応するかは、江戸時代になり、実証的な解剖や西洋医学が取り入れられた段階で認識されることになり、解体新書や整骨新書などで明らかになった。

### 大和言葉から推測される古代人の「骨」に対する認識について

今回の研究から多くの大和言葉による骨名を収集することはできたが、古代日本人が「骨」に対して、どのような認識を持っていたかについて、現代人のそれとどれほど異なっていたかを指摘することは容易ではない。上記の倭名類聚抄での表記より、骨の説明として「筋肉の中の果物のタネのような硬いもの」との解釈は顧野王の私案と考えられることは述べた。倭名類聚抄にこの説明を記載したということは、「骨」という漢字の表すものが、古代日本人の「ホネ」と同様の認識のものだと確認すること、また「骨髓」が「ホネの中にある脂」であるということの認識を当時の日本人に示すことを目的としているのかもしれない。骨と骨髓との関係については、平安時代の日本人には、上記のように骨髓を「スネ」、「スネシル」あるいは「ナヅキ」と呼び、一部、硬い頭蓋骨と内部の柔らかな塊である脳との相同的に理解していたようである。現代の解剖学では骨髓は造血組織ではあるが、成人になると四肢の長管骨の骨髓は造血能が失われて脂肪組織に変化してゆくのに対して、体幹の骨の骨髓の造血能は継続する [86]。したがってすべての骨の骨髓が脂肪組織というわけではない。

また源信の往生要集に記されているように、人体には多くの骨が互いにそれぞれの骨を支え合って人体の骨格が形成されているという認識もあったことは注目すべき点であると思われる [87]。

### 大和言葉による身体語彙研究の意義

近年における大和言葉による身体語彙についての研究



は、主として日本語学の研究者である宮地 [88] や前田ら [89] によって、身体語彙の歴史的変遷という視点からなされはじめ、新野の研究 [90, 91] によってより発展的研究がなされた。しかし身体語彙を研究する研究者は少なく、まだ研究対象も身体の一部に限られている。本研究は、「骨」に着目して、可能な限り直接、古文獻の写本を検索したことで、かなりの数の骨に関する語彙を収集することができた。本稿では、これらの身体語彙について、方言からみた視点を加え、また解剖学という新たな視点からもいくつかの解釈を試みた。「骨」を含めて、一般的に身体語彙は人間が用いる言語の中でも最も基本的な語彙であり、様々な歴史的な変遷を経ているものの大和言葉による身体語彙は、現代の我々から古代の日本語、そして原日本人の心情をうかがい知ることのできる貴重な資料である。本研究のような大和言葉による身体語彙を解剖学的な視点から研究する意義は大きいと思われる。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K18497 の助成を受けたものである。該当する利益相反はない。

## 文献

- [1] 中村啓信訳注 (2009) 古事記. 角川ソフィア文庫, p. 232
- [2] 坂本ら校訂 (2009) 日本書紀 (二). 岩波書店, p. 32
- [3] 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1971) 諸本集成倭名類聚抄 [本文編]. 臨川書店, p. 578
- [4] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 136
- [5] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 268
- [6] 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1967) 天治本新撰字鏡増訂版. 臨川書店, p. 179
- [7] 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1971) 諸本集成倭名類聚抄 [本文編]. 臨川書店, p. 574
- [8] 沖森編, 肥爪周二 (2010) 日本語史概説 音韻史. 朝倉書店, p. 22
- [9] 半田一郎 (1999) 琉球語辞典. 大学書林, p. 716
- [10] 知理真志保 (1954) 分類アイヌ語辞典第三巻人間篇. 岡書院, p. 387
- [11] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 17
- [12] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 283
- [13] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 9
- [14] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 135
- [15] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 267
- [16] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 7
- [17] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 14
- [18] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 18
- [19] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 284
- [20] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 20
- [21] 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1967) 天治本新撰字鏡増訂版. 臨川書店, p. 93
- [22] 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1967) 天治本新撰字鏡増訂版. 臨川書店, p. 94
- [23] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 11
- [24] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 288
- [25] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 8
- [26] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 13
- [27] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 9
- [28] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 285
- [29] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 11
- [30] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 289
- [31] 前田育徳会尊経閣文庫編 (2001) 尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三. 八木書店, p. 10
- [32] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編 (1976) 類聚名義抄観智院本佛. 八木書店, p. 290
- [33] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 4
- [34] 浅井正賛 (1861) 身体和名集. 国立国会図書館蔵書, p. 5
- [35] 大槻文彦, 大槻清彦 (1982) 新編大言海. 富山房, p. 1912
- [36] 藤原信実 (1998) 今物語 (三木訳注). 講談社学術文庫, p. 122
- [37] 新訳華厳経音義私記 国文学研究資料館データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200021027/viewer/1> (閲覧日 2022/7/1)
- [38] 岡本一抱 (1771) 校定引経訣 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000479?c=0&m=0&s=0&cv=13&r=0&xywh=-502%2C>

- 354%2C3695%2C1274（閲覧日 2022/7/1）
- [39] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 575
- [40] 笹野堅校訂（1943）能狂言（中）。岩波文庫, p. 89
- [41] 大槻文彦, 大槻清彦（1982）新編大言海。富山房, p. 1019
- [42] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 576
- [43] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 94
- [44] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 286
- [45] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 7
- [46] 大槻文彦, 大槻清彦（1982）新編大言海。富山房, p. 522
- [47] 土井ら編訳（1980）日葡辞書。岩波書店, p. 15
- [48] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本法。八木書店, p. 108
- [49] 佐竹ら校注（2014）万葉集（三）。岩波文庫, p. 102
- [50] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編：箋注倭名類聚抄]。臨川書店, p. 83
- [51] 島津久基校訂（1939）義経記。岩波文庫, p. 66
- [52] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 12
- [53] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 15
- [54] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 13
- [55] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 583
- [56] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本法。八木書店, p. 109
- [57] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 129
- [58] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 8
- [59] 前田育徳会尊経閣文庫編（2001）尊経閣善本影印集成 23 字鏡集三。八木書店, p. 137
- [60] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 233
- [61] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 253
- [62] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 22
- [63] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 180
- [64] 永積安明（1961）保元物語・平治物語（日本古典文学大系 31）。岩波書店, p. 147
- [65] 島津久基校訂（1939）義経記。岩波文庫, p. 76
- [66] 島津久基校訂（1939）義経記。岩波文庫, p. 299
- [67] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 231
- [68] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 38
- [69] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 577
- [70] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 178
- [71] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 269
- [72] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本佛。八木書店, p. 271
- [73] 中村啓信訳注（2009）古事記。角川ソフィア文庫, p. 43
- [74] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 581
- [75] 岡本一抱（1771）校定引経訣 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000479#?c=0&m=0&s=0&cv=20&r=0&xywh=846%2C633%2C1591%2C548>（閲覧日 2022/7/1）
- [76] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 16
- [77] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1971）諸本集成倭名類聚抄 [本文編]。臨川書店, p. 580
- [78] 浅井正賛（1861）身体和名集。国立国会図書館蔵書, p. 10
- [79] 大槻文彦, 大槻清彦（1982）新編大言海。富山房, p. 1117
- [80] 中村啓信訳注（2009）古事記。角川ソフィア文庫, p. 39
- [81] 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）類聚名義抄観智院本法。八木書店, p. 79
- [82] 第二次日本経穴委員会編（2009）詳解・経穴部位完全ガイド。古典から WHO 標準へ, 医歯薬出版, p. 410
- [83] 富士川游（1904）日本医学史 裳華房 p. 25（国立国会図書館デジタルコレクション）<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833360>（閲覧日 2022/7/1）
- [84] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, pp. 178–181
- [85] 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）天治本新撰字鏡増訂版。臨川書店, p. 807
- [86] 藤田恒太郎（2003）人体解剖学（改訂 42 版）。南江堂, p. 29
- [87] 源信（1994）往生要集（上）石田訳注（ワイド版岩波文庫）。岩波書店, p. 55
- [88] 宮地敦子（1979）身心語彙の史的研究。明治書院。

- [89] 前田富祺（1985）国語語彙史研究. 明治書院.  
[90] 新野直哉（1987）〈膝〉をめぐる類義語の史的研究—  
中世・近世を中心に—, 国語学 148: 16–29

- [91] 新野直哉（1989）〈後膝部〉の名称について, 国語学  
159: 25–37

## Study on the Original Japanese Names (Yamato Kotoba) of Human Bones Appeared in the Japanese Classical documents

Toru Noda

Department of Occupational Therapy, Faculty of Rehabilitation, Biwako Professional University of Rehabilitation

---

### Abstract

The Japanese names of human body parts have been changed due to the several deep cultural influences along Japanese history, mostly by the old Chinese and Korean culture. Especially the influences of Kampo-Medicine brought numerous names of human body parts derived from Chinese language in Japan. This anatomical terminology became the basis of Japanese Anatomical terminology. However, Japanese already had their original names of body parts in the ancient Japanese language. Among these names, expressed by Yamato-Kotoba (the ancient style of Japanese words), we still feel a trace of the “original” Japanese names at present. In this article, the author tries to pick up such old expressions of human bones among the Japanese classical literature or documents, such as, “Shinsennjikyō”, “Wamyouruijushō”, “Jikyōshū”, “Ruijumyōgishō”, and “Shintaiwamyōshū”. In order to distinguish the bone names by original Japanese (Yamato-kotoba) from the words of the imported Chinese medical terms, the author selected only the words having Japanese reading by “Man’yōgana” or “Katakana”. As a result, more than 100 original Japanese vocabulary related to human bones are collected. The author tried to classify them into several anatomical regions, and made some comments from anatomical and dialect view point. This study would contribute to the understanding of the ancient Japanese language and Japanese people.

---

**Keywords:** Human body, bones, Yamato-kotoba, Japanese

---